論文要約

心理臨床における関係性の視点

里見　聡

心理療法において，我々は通常のものとは異なった二重の人間関係を経験する。一つは特定の領域について知識と技術を持つ専門家とその専門家に援助を求める依頼者との間に成立する関係であり，それ自体は目的ではなく，ある問題解決のための手段としての関係である。しかし心理療法がいったん始まれば，クライエントと心理臨床家双方の過去経験に影響を受けた無意識的なものが働き，情緒的なものが支配的になる（成田，2001）。心理療法に関わる者はこれらの二重の関係性を生きなければならない。本論では，心理療法におけるこのような人間関係について考察を行った。

心理臨床面接における人間関係から心理臨床家の主観や主体性を排除しようと試み，クライエントの持つ問題だけを純粋に取り上げ，心理臨床家の知的解釈によってクライエントに知的洞察をもたらすことを目的としていた古典的精神分析を批判し，心理臨床家もまた，一つの主観性を持って面接における人間関係に加わるものとして相対化することが，1980 年代以降，複数の精神分析家によって同時並行的に提唱され始めた関係性理論に共通するものであった。その関係性理論も，初期段階では精神分析家とクライエントが互いに主観性を持つものであることを認めるところから始まり，それぞれ個別の主観的準拠枠を持つ主体がどのように認知，感情面での交流を図り，共感的理解を深めていくのか，といった相互交流に関するモデルが提唱されるようになっている。その中でも，Stern(2004)に見るように，近年の関係性理論においては，単に二つの主観性の交流に着目するだけではなく，その間に広がる「場」そのものを対象としてとらえようとする立場がある。心理臨床家とクライエントは，それぞれが面接場面に主観性を持ち込み,「場」を形成する。そして,それぞれがその「場」に影響を与える一方，場からもまた影響を受けながら面接を進めていくのである。この「場」は心理臨床家とクライエントの主観性から切り離すことは出来

ない一方，どちらかの主観性と同一のものでもない，移行対象としてとらえることのできるものである。関係性理論が Winnicott の移行対象の概念に注目するのはこの点にある。

Stern(2004)が自己感の発達の研究を通じて前提としているのは,個としての乳児であり，乳児が自己としての感覚を発達させる中で他者の存在を意識するようになり，自己の体験と他者の体験を重ね合わせる領域へと進んでいくことを想定しているのに対し，Winnicott(1971a)は母子一体としてのユニットを前提とし，それが母と子として分化していく過程の中で自他が重ね合わさる領域が生じることを想定している。両者の発達理論が前提としていることは異なるものの，Stern（2004）が「間主観的母体」，Wnnicott(1971a)が「可能性空間」と呼ぶような，自と他の間において，どちらにも所属することのない領域が存在し，その領域における，自と他を分かつと同時につなぎとめる対象の存在こそが，クライエントの体験の領域を広げ，治療的に作用するということは共通している。

一方，心理臨床家がクライエントと移行対象を重ね合わせる領域において，何が行われ，何が治療的に作用するのか，という点については，これまで十分に検討がなされてこなかった。移行対象や中間領域の重要性については指摘されてきたものの，その内実については，症例や事例検討の形で示されるにとどまり（Winnicott,1971b; 貞安,2014），実証的な方法で移行対象がどのように扱われ，二者関係にどのような影響を及ぼしつつ推移していくのか，どのように移行対象や中間領域を扱うことが治療的に作用するのかということについては明らかでなかったと言える。Winnicott(1971a)も，中間領域において「遊ぶ」ことの重要性については繰り返し強調しているが,「どのように」遊ぶことが治療的に作用するのかについては，心理臨床家の感性を重視し，詳しく述べていない。

第一章では，精神分析を中心に，間主観性理論に関する文献をレビューし，クライエントの精神内界を客観的に取り上げることを目指した古典的精神分析から，心理臨床家とクライエントとの主観性の交わる場として取り上げる関係性理論への変遷についてたどる中で，関係性理論がどのような背景を持って生まれ，どのように展開してきたのかについて展望した。そして，心理臨床家と

クライエントの主体性を独立したものとして捉えるのではなく，その交流の場こそが治療の主体として機能するという，コンテクストを主眼においた心理臨床面接におけるモデルを取り上げ，このモデルを読み解く鍵として，Winnicott の移行対象の概念を考慮に入れながら，心理臨床面接における間主観性について考察を深めた。

第二章においては，第一章において展望した理論を踏まえ，Winnicott が臨床場面で用いたスクィグル・ゲームを用いて心理臨床面接における間主観性について実験的な研究を行った。スクィグル・ゲームを面接者・被験者の移行対象を重ね合わせる場としてとらえ,その中で両者の関係性がどのように推移し，何が生み出されているのかについて，統計的手法と事例研究によって明らかにすることを試みた。その結果，面接に関わる二者の関係性が，なぐり描き，描画によっていかに変化し，そして同時に，なぐり描きや描画が二者の関係性に影響を与えるのかについて，検討可能な視点や指標の一端を提示することができた。特に，面接者がなぐり描き線や描画の内容を主導的に変換させた場合，被験者が面接者との間に距離感を感じやすいことや，被験者がなぐり描き線の変化を主導的に変化させていくことで，被験者が安心して自己表現ができるという結果が得られたことについては，スクィグル・ゲームを臨床場面で用いる際に，新たな示唆を与えるものであると考えられる。もっとも，Winnicott（1971a）が，面接の内容の豊かさは「夢が夜明けとともに萎えてしまうように」失われてしまいがちであると述べるように，面接はそれぞれが一回性，特異性を持ち，面接に関わる両者の主体性や関係性に規定されるものであり，定式化しようとした途端，移行対象の持つ生き生きとした側面が活かされなくなるおそれがある。移行対象とは何かを探る過程自体が，そのような矛盾を孕むものであることも，考慮に入れておかねばならない。移行対象の治療的側面を明らかにすることは重要であるが，一方で，面接ではそれをいったん忘れ，自由に「遊ぶ」ことも必要になるであろう。

臨床場面において関係性の視点が重要になるのは心理療法に限らない。非行臨床においても同様であり，非行少年とそれに関わる支援者との関係性の視点を抜きに非行からの立ち直りを語ることはできない。第三章では文献研究を行い，非行からの立ち直りに関する理論を概観することで，非行少年の側に原因

を帰属し，非行に影響を及ぼす要因を特定し，それを除去することが非行からの立ち直りに必要であると考えられていた非行臨床の理論が，近年，非行少年と援助者との出会いの構造から理解しようとする方向に変化してきていることを示し，非行臨床に関係性の視点を導入することの重要性について指摘した。

第四章では，非行臨床の現場において従来明らかにされてこなかった，心理臨床家とクライエントの個人的要因，面接の中での交流から生まれる互いの感情体験，面接で話し合われる内容及びアセスメント・レポートがそれぞれどのように影響しあっているのかを，少年鑑別所における資質鑑別面接を分析することによって検討し，一つのモデルを提示した。

少年鑑別所における資質鑑別面接は，非行少年と心理臨床家の出会いの場であるとともに，非行少年のアセスメントを行う場でもある。対象者の臨床像を正確に伝えることを目的とする心理査定においても，「誰が」「どのように」関わるのかということの影響から逃れることはできない。氏原（2003）が「心理テストの解釈においては，被験者の反応に解釈者の「こころ」が動かされ，その動きの意味を解釈者が自分に納得できる形で解いてゆくと，それが第三者の「こころ」にも響く」と述べているように，心理アセスメントにおいて，関わる側と対象者との主観性が相互に影響し合う中で面接のプロセスが進むだけではなく，アセスメントの結果の解釈やその報告書に至るまで，間主観性の観点からとらえることが必要である。

心理臨床家（少年鑑別所に勤務する心理技官），非行少年双方から，面接において何を考え，感じていたのかについての内省を基に質的分析を進める中で，アセスメントが単に少年や非行事実を客観視し，事実関係を明らかにするというだけではなく，心理技官が非行少年との関係性に影響を受けつつも，適切な距離を測りながらアセスメントを進めているということが明らかになった。アセスメントは，治療関係とは異なり，対象者の状態像についてひとまとまりの筋道の立った文章として表現することが求められる。心理技官と非行少年との，言葉になりきらない「今，ここで」の情緒的交流を，公共性を担保した文章へと昇華させる過程についても，現場で勤務する心理技官の実感，内的プロセスを通じて実証的に明らかにすることができた。

少年と心理技官とが面接のやり取りの中で抱く感情や思考は，それぞれの面

接外での経験に影響されている。面接の中で，少年は自らの個人的体験について話をするが，それをどのように話すかは，少年がこれまでに形成してきた認知の枠組み，すなわち主観的準拠枠に依拠するところが大きい。また，話す相手の印象なども語りに大きく影響するが，そこには少年自身の親に対する思いが投影されるなど，面接外の要因を面接に持ち込んでいることが想定される。また，心理技官においても，面接における少年との交流の中で様々な感情体験が生まれているが，これについても，心理技官自身の面接外での経験や知識に影響を受けている部分が大きく，逆転移も含まれている。心理技官，少年共に面接外での要因を面接に持ち込みつつ，面接では共通の話題について掘り下げていく，この共同作業においては，どれが心理技官，少年個々の要因によるものなのか，どれが面接場面での相互交流によるものなのかの明確な線引きを行うことは難しい。さらに，アセスメントの成果物である鑑別結果通知書についても,心理技官の知識や臨床経験,個人的経験が色濃く反映されるだけでなく，面接においてどのような間主観的交流がなされたのかによっても大きく左右される。アセスメントにおけるレポートは，心理の専門家による見立てを具体化したものであるが，そこに至るまでの過程においては，専門家が対象者に見立てを伝え，対象者からフィードバックを受け，専門家がさらに補強や修正を加えて対象者に提示する，という共同作業から成り立っているのである。

第四章ではさらに，心理技官が少年の更生や内省の深まりを願う思いをもって面接に臨んでおり，少年がそれを受けて心理技官に肯定的な印象を持つことが，面接の基盤にあることが明らかになった。森（2010）は「心理療法過程における治療的変化を促進する要因としては，セラピストが語る内容，語り方以上に，相互交流・＜体験の現れ＞を通してクライエントに伝わるセラピストの感性・姿勢・暗黙の信念・意図・思いが非常に重要である。」と述べているが，アセスメントにおいても，言葉としては直接表現されない姿勢や態度・信念といったものが面接のプロセスを考える上で不可欠である。このような言葉にならないものを，面接に関わる両者の間で言葉として共有したり，共通認識として意識化したりすることは必ずしも必要ではない。心理技官が両者の間に漂う「関係性をめぐる暗黙の知(Boston Change Process Study Group, 2010)」を基本にして面接が展開することを自覚し，そこから生まれてくるものを待つ開

かれた姿勢が少年の自発的な自己表現を促進し，見立てをめぐる心理技官との心的交流を支え,最終的にはアセスメント･レポートへと反映されるのである。

スクィグル・ゲームを用いた心理療法であっても，司法領域におけるアセスメント面接であっても，クライエントを支援しようとする心理臨床家の姿勢や思いを基調として，クライエントの心理臨床家への信頼が形成され，自己開示が促進される。クライエントが提示する問題を巡って心理臨床家の思考や感情が刺激され，心理臨床家が自らの思いや考えを伝える中で二者の関係性と，心理臨床家，クライエント双方の内的プロセスが進展していく。心理臨床家とクライエントの関係性及びそこで話し合われる内容（クライエントの主訴や心理臨床家の見立て）については，二者の個別の内的プロセスと分かつことのできない移行対象としての意味合いを持つ。二者の移行対象が重なり合う領域において，心理療法やアセスメントが進められるが，心理臨床家とクライエントは同じ立場にいるわけではない。クライエントは何らかの問題を持ち，それを解決したいと望み，心理臨床家はそれを支援する専門家であり，専門家はクライエントの移行対象を適切な形で扱いつつ，自らの移行対象を提示し，適度な遊びをもって治療的に利用できるような状態を保たなければならない。「移行対象は，乳幼児がその扱い方を変えようとしない限り，決して外から無理やり変えられてはならない（川上,2012)」のであり，あくまで移行対象はクライエント主導で，クライエントが思いのままに扱うことのできる状態にしておかなければならない。心理臨床家は自らの移行対象を提示するにあたって，クライエントの自己表現を阻害することのないように配慮する必要がある。心理臨床家は面接全体を方向付けつつ，クライエントが自由にいられる領域を確保することが重要であると考えられる。

引用文献

Boston Change Process Study Group 2010 Change in Psychotherapy: A Unifying Paradigm. W. W. Norton & Company, Inc.（丸田俊彦訳 2011 解釈を超えて　サイコセラピーにおける治療変化的プロセス　岩崎学術出版社）

川上範夫　2012　ウィニコットがひらく豊かな心理臨床　「ほどよい関係性」に基づく実践体験論　明石書店

森さち子 2010 かかわり合いの心理臨床　体験すること・言葉にすることの精神分析　誠信書房

成田　善弘　2001　心理療法的関係の二重性　河合隼雄総編集　心理療法と人間関係　口座心理療法第６巻　岩波書店 pp.25-66

貞安元　2014　青年期の心理療法における親面接実施をめぐる力動的相互交流　心理臨床学研究,32(1);62-71.

Stern, D. N. 2004 The Present Moment in Psychotherapy and Everyday Life. W. W. Norton & Company. Inc.（奥寺崇監訳　津島豊美訳 2007 プレゼントモーメント　精神療法と日常生活における現在の瞬間　岩崎学術出版社）

氏原宏　2003　心理アセスメントと臨床心理的行為　臨床心理学, 3(4);439-446.

Winnicott,D.W. 1971a Playing and Reality. Tavistock Publications. （橋本雅雄・大矢泰士訳　2015　改訳遊ぶことと現実　岩崎学術出版社）

Winnicott,D.W. 1971b Therapeutic Consultations in Child Psychiatry. The Hogarth Press.（橋本雅雄，大矢泰士監訳　2011　子どもの治療相談面接　岩崎学術出版社）